
左手に黒い羽根

吉田 とら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左手に黒い羽根

【Nコード】

N1503P

【作者名】

吉田 とら

【あらすじ】

悪鬼はびこる異世界で、15歳の少年が小さな冒険をするお話。冒険とは名ばかりで、ホントは隣町までの単なるお遣い。だったはずが、事件は一変。どうやら少年が狙われているようである。主人公リリスの狙われる理由が分からないまま、道中で偶然出会ったカンナは奮闘するが、またこのカンナにも人に教えたくない秘密があった。

第1話

一筋の煙が、木々の隙間から立ち上っていく。

静かな森の奥。手作りの祭壇の前で、15歳くらいだろうか、旅装束を身にまとった小柄な少年が祈りを捧げていた。

村や森の外には悪鬼がびこる危ない時代。そのために、成人の儀式を迎えることの出来ない者は、単独で旅に出ることは禁止されている。

そしてこの少年は今まさに、その成人の儀式を終えようとしていた。

「そのおんみたまよ、われをまもりたまえー」

いささか棒読みな気がしなくてもないが、ようは儀式が終わりさえすればいいのである。この儀式に効力はない、あくまでも村のしきたり的なものののだ。とおい昔から今もずっと、こうやって森の精霊からの祝福を受け、人々は旅に出る。

少年は深々と頭を下げて何らかの恩恵を受けた気になると、その祭壇の火をササッと消した。

「よし、こんなもんか」

しかしひとりで初めて儀式を終わらせると、なんだか一回り大きくなった気がしなくてもない。今日は彼にとって、初めての旅立ちの日。今までの家族旅行とは違うのだ。

少年は手早く儀式の祭壇を片付けると、森の出口の方へと向かった。

木々の間を抜けた途端、眩しい日の光に照りつけられて、少年を目を細めた。

目の前にあるのは白い……。

「俺のパンツじゃねーか。なんて雰囲気のない……」

目の前では少年が普段身につける下着が、そよそよと風に揺らい

で揺れていた。暖かい日の光を浴びているそれは、身につけた瞬間さぞやほっこりすることだろう。履き心地を想像して、少しだけ幸せな気分浸る。

「あら、リリース。儀式が終わったのね」

そのパンツの向こうから、よく知った顔がひょっこり現れた。紛れもない、少年リリースの母親だ。

幸福感に酔っていたリリースは、途端に顔の筋肉をピツと引き締めた。

「なんだよー。せっかくカッコよく儀式を終わらせたと思ったら、こんなところにオチ?!」

「なによ、オチって。それにしても、あなたもようやくひとりで儀式が出来るようになったのね」

洗濯物を干し続けながら母親がしみじみと言ってくる。

「母さん、別に今日でサヨナラってワケじゃないんだから」

「でもひとりで旅に出るのは大変なことよ」

「旅って言っても、隣町に忘れ物を届けるだけでしょ」

リリースは苦笑いをこぼした。

今回は旅と言うまでもない、いわばおつかいのようなものだ。隣町で仕事をしている父親に、忘れ物を届けに行くだけである。

たったそれだけなのだが、村から出るだけでも必ずあの大げさな儀式が必要になる。風習とは不可解なものだ。

「あらリリースちゃん、旅装束! やつと一人旅に出られるのね!」

庭先で母親と話しているところへ、通りかかった隣のおばさんが声をかけてきた。

やっと、などと言われるともう身も蓋もない。どんなに格好をつけたところで、リリースがこの村で成人の儀式を終えていない最後の1人だったのだ。彼よりも年が若い子ども達は、すでに儀式を終えて容易に他の村と行き来している。

母親とおばさんで井戸端会議を始めたところで、リリースはそろりと庭を出ることにした。これ以上2人に絡まれていては、出発が遅

れてしまう。

「リリス、ちょっと待って」

垣根を越えようとしたところで、母親に呼び止められた。振り返ると、彼女は抱きしめてくる。

「ちょ、母さんっ」

「黙ってなさい」

「だって、子どもじゃないんだからっ」

「我が息子に神の御加護を」

「……」

母親のあまりにも真剣な声に、リリスは黙り込んだ。1分弱の短いお祈りの末に、母親からふわりと解放される。

「……今のも儀式かなにか？」

「ううん、ただのスキンシップ」

「なっ」

リリスは思わず赤面した。なんか騙された気分だ。儀式でも何でもないんだったら、端から見ればただの甘えん坊の15歳じゃないか。

ここにずっといたら、延々とこうやって遊ばれる気がする。

「行ってきます！」

「行つてらっしゃい、気をつけるのよ」

「分かつてるって！」

庭先でふわふわと笑う母親に手を振ると、リリスは村の外へと駆け出した。

キラキラと光る、未知の世界へ。

第2話

村から隣町までの街道を歩くリリスの足取りは軽い。

村の周囲は根菜類の畑が多いが、しばらくするとオレンジの樹木が並ぶ畑に変わる。今はまだ時期ではないが、あと少しすれば白い花が咲くのだろう。

両親と何度か通った道を、今日はたったひとりで歩く。不安感など微塵もない、あるのは好奇心と開放感。

正直、出発前の儀式をするまでは若干の不安があった。でもいざ一仕事終えてみれば、なんだか肝が据わったような気がした。さすが、長年言い伝えられている伝統だけはある。

自分の乏しい記憶力によれば、このオレンジ畑の先に森があったはず。その森を抜け、今度はリンゴの畑の中をくぐり抜けたら隣町があるのだ。

青い空を仰ぎ爽やかな風を受けながら、リリスは隣町へとひたすらに歩く。このペースなら夕刻には到着できそうだ。

のんびりと街道を歩いていると、ふと、前方に不思議なものを見た。

リリスはぱたりと立ち止まる。

森の入口手前あたりだろうか、道の真ん中になにやら黒いものが置かれているのが見える。今いるところから距離があるので、それが何なのかはまだハッキリしない。

（鬼……とか？）

村を出れば悪鬼はびこると昔から聞かされていた。実際にその悪鬼とやらを見たことはないが、あそこに見えているのがまさにそれではないのだろうか。

リリスはどこか回り道がないか、ぐるりと周囲を見渡した。できればあそこを通るのはご免こおむりたい。

しかし見渡しても畑ばかりでほかに道はなかった。畑に入り込ん

でもよいが、それで方向を見失ってはどうしようもない。

リリスは一呼吸おくと、その黒いものに向かって歩み出した。で
きるだけ音を立てずに、出来るだけ道の端を歩く。

よくよく近づいてみると、それがどうやら人の形をしていること
がわかった。

「人?!」

リリスは慌てて駆け寄る。

「おい、大丈夫か?!」

声をかけたところでピクリとも動かない。仕方がないのでそいつ
を揺さぶってみる。

「おい、死んでるのか?!　じゃあ俺は死体を触ってるのか?!」

そうして自分が放った言葉に、リリスは勢いよく両手を引っ込め
た。腿の辺りで手のひらをぬぐう。

そのとき、目の前の死体が身じろぎをした。

「うっー……」

(ぞ、ゾンビッ)

リリスは思いつきり後退した。するとゾンビはうめくように呟い
た。

「は……腹、減った」

リリスは急いで自分のバッグを漁る。たしかパンを入れたはずだ。
今朝、食卓から焼きたてをくすねてきたのだ。

リリスはそれを見つけ出すと、ゾンビに素早く差し出した。

「コレあげるから!」

ゾンビはむくりと起き上がる。

「わっわっ、俺は食べないで!　まだ死ぬわけにはいかないんだっ
」

リリスの必死な願いをよそに、ゾンビは無言のままパンを手
取る。そのままぺろりと食べあげた。

そのパンの味の名残を惜しむかのように親指を舐めながらリリス
に視線を移した。

（次はまさか俺?!）

「わっ、食べないでっ」

素早く後じさる。

「……食つか、ボケ」

ゾンビは呆れたように言った。リリスの言葉がパツと明るくなる。
「そっか食わないのか、よかったー。ボケなのか、よかった……よくないわーッ」

「変なヤツ」

「変なのはお前だっ。ゾンビのくせにっ」

「……あのな、俺のどこがゾンビなんだ」

目の前のゾンビはあからさまに大きなため息をついた。リリスは小首をかしげる。

「もしかして、ゾンビじゃないのか？」

「もしかしくなくても、元からそんなものじゃない」

「信じていいんだな？」

「お前次第」

ゾンビはそう言いながら立ち上がった。

「お陰で助かった。礼を言う」

「どこが行くのか？」

立ち上がったゾンビにリリスは尋ねた。相手はうなずく。

「ああ、先を急ぐのでな。この借りはいつか返す」

それだけ言うと、振り返りもせず歩き出した。リリスは呼び止める。

「ちょ、ちょっと待てよっ」

「なんだ、まだなにか用か」

「なんだはないだろ、俺は一応お前の命の恩人なんだから。借りをいつか返してくれるんだっいたらせめて名前くらい教えろよ。そうしないとお前はいつまでたっても俺の中でゾンビなんだからなっ。隣のおばさんにも言ってる、今日ゾンビに会ったよー、怖かったよー、食べられ……」

「……カンナ」

彼は頭を押さえながら言った。

「俺の名前はカンナ」

「そっか、カンナか」

リリスは満足げにうなずいた。

「じゃあな、カンナ。気をつけて」

「ああ、またな」

カンナは軽く手を挙げると、すぐにその場を立ち去ってしまった。

「俺もこうしちゃいられないな」

とりあえず悪鬼でなくてよかった。昼ご飯はなくなったけど、一食抜いたくらいで死ぬことはないだろう。

それにしても印象的な奴だったな、とリリスはぼんやり思った。

黒いシャツ、黒いズボン、黒いマント。黒い髪に瞳に、それから褐色の肌。真っ黒すぎて、ゾンビとまではいかなくとも死神かと思っってしまった。

「でも鎌持ってなかったし」

幼い頃に何度も読み直した絵本に出てきた死神の姿を思い描きながら、ひとりうんうんとうなずく。

「それに死神だったら腹が減って行き倒れることもないだろうな」
そう呟いてそれから、また会えるかな、となんとなく思った。

第3話

巨大都市、ラダト。

リリスの言う隣町の正式名称である。

中央の大通りをひっきりなしに馬車が行き交い、煌びやかに着飾った貴婦人たちは優雅にショッピングを楽しみ、汽車の汽笛が鳴り響く、そんな大都市である。

牛がもーもー、山羊がめーめー鳴いているリリスの住む村とは大違いなのである。

そこへリリスがたどり着いたのは、すっかり日も暮れたところだった。

（相変わらずでけー……）

きらきらと輝き始めているネオンの街を見上げながら、リリスはただ呆然と立ち尽くしていた。

このラダトの街は中央の一番高いところに大聖堂が建てられ、それを中心に放射線状に大通りが伸びる。街は階段状に4つに分かれていて、一番高いところに大聖堂、次の層が居住区で、この街の統治者やそれに関わる人々、比較的裕福な人々が住む。3層目は商業地区、そして一番低い層には、スラムとまではいえないが、決して裕福とは呼べない人々が生活を営んでいた。

リリスが目指すのは、中央にそびえる大聖堂。

と言いたところだが、こんなに暗くてはもう扉は閉まっているだろう。届け物は明日渡すしかない。

リリスは商業地区をあてもなく歩く。ほどなくして大通りのとある角に宿を発見し、今日はそこで一晚お世話になることにしたのだった。

午前2時。

日が高いうちは街道で行き倒れていたカンナもラダトへ到着していた。ほの暗い裏路地をぶらりと散歩していると、バタバタと走る足音が聞こえてきた。

（ラダトの治安はいいはずだが……）

盗賊のたぐいかと、カンナは物陰に身を潜める。すると、目の前を通り過ぎていったのは火消し隊だった。

「出火元は?!」

「その宿屋だっ」

どうやら、ここからそう遠くない場所で火が出たようだ。

（俺には関係ないな）

あいにく野次馬をする趣味は持ち合わせていない。

しかし、何か引つかかる。この感覚、なにかに引き寄せられているような感覚だ。

「チッ」

カンナは小さく舌打ちすると、火消し達が走り去っていった方へ駆けだした。

そもそもカンナがここにいるのは、何かに呼ばれたからである。しかし何に呼ばれたのか、そいつがどこにいるのか分からない。このラダトにいるのかも不明だ。

その探しものが火事場に在るのだろうか、と考えている間に、件の宿屋の前まで来た。

その宿はごうごうと音を立てながら、赤い炎と黒煙を吐いていた。火消し隊たちが突破口を開こうとホースでありったけの水をかけている。

「生存者はっ?」

「未だ確認できないっ。しかしこの火では……」

ひとりの火消しが絶望的な台詞をこぼした。

たしかに、彼らが一步も踏み入れることの出来ない程の強い火だ。中にいる人間の生存は難しいだろう。

（ただの火じゃないな）

野次馬にまぎれつつそれを遠巻きに眺めながら、カンナは思った。これだけ水をかけても一向に消えない。これはもしかしたら魔法で作られたのかもしれない。

魔法とは、その昔、人間の感性が生み出した不思議な力である。人それぞれに固有の属性があり、それに見合った力を各々が持っていた。

しかしその感性も徐々に必要度を無くし、文明の進化の途中でその力は消えてしまったという。ごくまれに使える者がいるらしいが、それも噂でしかない。だから、この目の前の火が魔法で作られたものだという発想に至らないのも仕方がない。

カンナは口の中で小さく何かを唱えると、宿屋の裏手へ回った。誰も見ていないことを確認し、焼け落ちた勝手口から、なんのためらいもなく中へと入る。

そこは凄まじい有様だった。全てのものが炎に包まれ炭と化している。

炎に包まれながらもまだ息のある者が、朦朧とした意識の中、救いを求めてカンナに手を伸ばしてくる。

カンナは彼の手を取ると、口の中で再び何かを呟いた。手のひらを伝って青い光がはらりと舞い落ちる。不思議なことに、その一帯の炎が沈静した。

息ある者にはその不思議な光を施しながら、カンナはひとつずつ部屋を覗く。

火の粉が弾けては降り注ぐ。しかしそれはカンナの皮膚にたどり着く前に青く溶けて消える。

（ここじゃない）

先ほどから頭の中に呼びかけてくるものがある。人であるのか物であるのかわからないが、この宿の中にあるのは確かだ。奥に進むにつれ、脳裏の警告音が強くなる。

いくつかの部屋を見たのだろうか。カンナは見覚えのある背中を見

つけた。それは何やら小さくぶつぶつと唱えている。

「おい、お前」

声をかけると、すっかり怯えきった顔がこちらを振り向いた。

「！」

彼はカンナを見た瞬間、安堵と喜びの表情を見せた。

「カンナーッ」

涙目のままカンナに勢いよく飛びついてきたのは、そう、昼間出会ったリリスである。

抱きつかれた瞬間、カンナの中の警告音がぱたりと静かになる。

「お前……」

「いやあ、こんなところで会えるなんてなっ。カンナも逃げ遅れたのか？　なんか気がついたら部屋に火がついてるし、みんなバタバタ倒れていくしさ。すっげー怖かった！」

カンナにしっかりと抱きついたまま、勢いに任せてしゃべり立てる。

「いいから落ち着け」

カンナはリリスを身体から剥がすと、火の粉を払ってやるように彼の両肩両腕を軽く叩いた。幸いにして、彼の身体に火傷などは全くないようだ。

「よほど強い精霊に守られているようだな」

魔法の炎にも負けないくらい強い精霊に。

「精霊？　やっぱ旅の前の儀式が効いたのかなあ」

「そういえば、さつきは何を呟いていたんだ」

「あー、あれね。おまじないだよ、ただの。怖いときに唱えると怖くなくなるって。昔、えっと、母さんが……」

リリスは恥ずかしそうに語尾を細めた。15歳にもなって母親の気休めを信じているということを公言しているということに、はたと気がついたのだ。

しかし彼はおまじないだと言ったが、カンナの知りうる限り、さつきのはどう聞いても魔法だった。

「まあいい。行くぞ」

いぶかしげにリリスを見下ろしていたが、カンナはくるりときびすを返し、出口へと歩き出す。

「え？ どこに？」

「ここで燃え尽きたいか」

「それは嫌だ」

リリスは大きくかぶりを振った。

「じゃあ行くぞ。火のまわりが異常に早い。気をつける」

「おうっ、任せろ」

何を任せるのかは知らないが、リリスは足元で炎をあげる角材を飛び越えると、カンナの後へと続いた。

第4話

たどり着いたのは、街のはずれの納屋だった。今はもう誰も住んでいない農家の敷地内にある、掃除箱のような小さな部屋だ。

リリスは思わず、大きな家屋の方を指さした。

「え、大きい家あるじゃん」

「家だと思つかる可能性が高い」

「見つかる？ 誰に？」

「お前には関係ない。さつさと寝ることだ」

カンナはため息混じりに言い放った。言つたところで彼が理解出来ると思えないし、理解させて不安を与えても仕方がない。

リリスは小首をかしげたが、あまり深く考えるのは苦手なようで、すぐさま積んである枯れ草で寢床を作り始めた。先ほど火事で怖い目に遭つたと思えないほど楽しそうに、鼻歌まじりに枯れ草のベッドをこしらえている。

「そうだ！」

リリスは思い出したように顔を上げて、カンナに微笑みかけた。

「助けてくれてありがとな」

「……なんだ急に」

「うん。まだお礼言つてなかったから。正直言うと、今日はもうダメだと思つたんだ」

「そうか。昼間の借りを返したまでだ、気にするな」

「うん、ありがとう。じゃあ先に寝るね」

呑気な声でおやすみと言つてのけると、リリスは枯れ草ベッドに横になった。

と思つたら、再びがばりと起き上がった。

「忘れてた！ お祈り！」

ぶつぶつうるさいけどごめんねと一言謝ると、リリスはその場で手を組み目を伏せて、なにやら小さく唱え始めた。

「しゅよ、そのおんみたまにて、われをしんえんへといざない……」
「……」

そんな棒読みで大丈夫なのかと言いたい。

おそらくリリス自身は、その文言の意図するところを分かっているだろう。台詞に抑揚がない分聞き取りづらいが、自分が深い眠りについているときに周囲の外敵から守ってくれ、というような意味だ。

古代の、結界の魔法だ。

「それも母親に習ったまじないか？」

祈りを捧げ終わったところでリリスに確認すると、彼は横にかぶりを振った。

「うっん。これは父さんから」

「そうか」

夫婦揃って魔術師、という噂は聞いたことがない。

ということはやはりこの少年は、これらのまじないとやらを魔法として習ったわけではないようだ。それは日常の中に、ごく自然に存在するのだろう。

リリスは再び就寝の挨拶をすると、今度こそ枯れ草の中に潜り込んだ。

（……変なヤツ）

カンナはまた一つため息を吐くと、そのまま壁にもたれかかった。それにしても、大変なものを拾ってしまった。

先ほどの火事は、間違いなくこの目の前の少年を狙ったものだ。それは、彼のいた部屋だけ火のまわりが異常に早かったことから伺える。唯一の救いは、彼が普通よりも強い精霊によって守られているということ。

もしかしたら先ほど唱えていたような祈りが、実際に効力を発揮していたのかも知れない。あの棒読みの詠唱で。

（コイツ、何者だ）

純粹なのかおとぼけなのかバカなのか分からないが、放火犯から

すれば、存分に狙う価値はあるのだろつ。見た目は普通の少年だのにだ。

そして、ソレに呼ばれたであろう自分。リリースと再会してから、頭に鳴り響いていた警告音はどこかへ消えた。それは、自分の目的がリリースと会うことだったという事にほかならない。

そこに如何ほどの意味があるのか、まだ未熟なカンナでは全く分からない。とにかく今わかることは、この目の前の少年を取り巻く危険が、これだけでは終わらないだろうということだ。

明日もおそらく狙われる。あんな火事まで起こすくらいなのだから、冷やかしてはいはずだ。

そんな予感を胸に抱きつつ、カンナもまた目を閉じた。

「晴れたなーっ」

翌日。

外に出たリリースは、見事なまでの快晴に大きく背伸びをした。

「カンナはこれからどうすんの？ 俺は今日は大聖堂に行かなきゃいけないんだけど」

「ラダトに行くのか」

「そつだよ」

リリースの軽快な返答にカンナは唸った。街の中には昨日の放火犯がいるかもしれない。彼は明らかにリリースを狙っている。

「家に帰るといふ選択肢はないのか」

「届け物が終わったら帰るよ」

リリースにもラダトに行く目的がある。

出来ればラダトには行つて欲しくないが、そのためには理由を話さなければならぬ。それに、今はまだあくまでも予測の段階なのだ。

（今話すのは得策じゃないな）

不安感を与えるだけで終わってしまいそうだ。

だからといってリリスを放っておくわけにもいくまい。

他人との厄介事にはなるべく首を突っ込まないようにしているが、リリスに呼ばれた目的が分からない今、呼び主を危険にさらすわけにもいかないだろう。

カンナはこっそりため息をつくど、リリスに同行を申し出た。

「俺もそこについていいいか？」

「ホントに?! もちろん大歓迎だよ、父さんもいるし」

カンナの心配を余所に、彼を父親にも紹介しようと浮き足立つリリスであった。

第5話

さて、早速ラダトへ出発、と言いたいところだが、育ち盛りのリリスにとって朝食は必要不可欠である。

納屋の中に戻ると、昨日の夕方買い込んだ軽食を木箱の上に並べる。

「ちゃんとカンナの分もあるからな」

「そりやどうも。で、大聖堂に何を届けるんだ」

カンナが尋ねると、リリスは誇らしげに笑った。

「俺の父さん、設計士なんだ。今回のラダト大聖堂の改修工事の専任に選ばれてさ」

「その父親に届けるものがあるっていうことか」

「そう、コレ」

リリスはバッグの奥底から、小さく折りたたまれた紙を取り出した。カンナに手渡すと広げてみるように促す。

「スゴイだろ」

広げてみると、沢山の線が幾筋にも引かれ、数字や文字が細かく書き込まれている。そう、それは大聖堂の設計図だった。

カンナは少しだけ違和感を覚えた。設計士なのだから、設計図は必需品。それを忘れるなどということがあるのだろうか。さらに、彼の父は大聖堂改修工事に抜擢されるほどの腕を持っているのだ。仕事道具を忘れること自体、まずあり得ない。

第一、改修工事はすでに何週間も前から着手されているのである。「今更持つて行くのか？」

「……俺もよくわかんないんだけどさっ」

一瞬の沈黙のあと、リリスはカラッと笑った。

「お前、隠し事って苦手だろう」

カンナは手元の設計図を元のように折りたたみながら、呆れたように言い放つ。リリスは苦笑いをこぼした。それから急に真剣な顔

をする。

「俺……偶然聞いたんだよ」

リリスは、あの月のない夜のことを思い出しながら話し始めた。妙な胸騒ぎがした夜だった。お祈りをして床についたけれども全然眠れなくて、とりあえず水でも飲んで喉を潤そうとベッドから這い出た。

部屋のドアをほんの少し開けたところで、リビングに人がいることに気がついたのだ。

（……お客さん？）

小さくささやくような声が聞こえて、リリスは思わず耳をそばだてた。

「大聖堂の中に？」

これは父親の声。

「そうだ。報酬は……こんなもんでどうだ」

これは聞いたことのない声。

そういえば、今度大聖堂を改築するとか言って、父親が設計図の作成に取りかかっていたが、その中に何かを作るということか。

「いや、しかし……神聖な場所であるから」

「だからだよ。それともなんだ？ この村が無くなってもいいのか？」

「そ、それだけは」

「だったら話は早いだろ。金もこれだけ出すって言ってるんだ」

（……脅されてる？）

声だけを頼りに、リリスは会話の趣旨を読み取るうとした。

しばらくの沈黙のあと、父親の弱々しい声が聞こえた。

「……わかった」

村と引き替えにされては、逆らうに逆らえないのだろう。

「最初からそう言えばいいんだよ。出来上がった設計図の原本は絶対に持つてくるなよ。でも聖堂の中にこんなのがあったら、驚くだろうなア」

カラカラと乾いた男の笑い声だけが、妙に耳にこびりついた。
それが、あの夜の記憶。

神妙な面持ちのまま、リリスはカンナから受け取った設計図を再び広げる。

「脅されてたんだ、父さん。でも設計図を持ってこいって言ったつていうことは、神官さまに言うのかもしれない」

「……そうか」

「でね。気になる箇所はここなんだ」

開いた設計図の一角を指さす。ちょうど祭壇の裏辺りに、小さな空間がある。

「その男は、ここに盗賊のアジトを作るって言ってた」

「そこに潜り込むのか？ それでどうするつもりだ」

「潜り込まないよ」

設計図で場所を確認すると、リリスは手早くその図を折りたたむ。あまり外に出しておきたくないのだろう。

「俺の力じゃアジト壊滅なんて無理。でもこの設計図を警備隊に差し出したところで、俺たちの村の安全まで保証されるわけじゃないだからね、ここの隠し部屋の入口を開けておくんだ」

「現場の神官たちに発見させるっていうことが。現場で起こった偶然の事故であれば、村は関係ないからな」

「そういうこと」

リリスはそこまで話すと、目の前の朝食を素早くたிரけた。

「できれば父さんが神官さまに進言する前に事を起こしたい。その、もしよければカンナ……手伝ってくれないかな」

「ここまで聞いて、無視は出来ないだろう？」

「ありがとう！」

「だがお前、そういう話はもっと慎重にしろ。俺だったから良かったものの。他のヤツには話してないだろうな」

もしかしたら昨夜の放火は、この設計図を狙ったものだったかもしれない。

しかしカンナの予測とは裏腹に、リリスはとんでもないとかぶりを振った。

「こんなこと誰にも言えないよ！ 誰が敵で誰が味方が分からないのに！」

でもカンナならきつと大丈夫だって思ったんだよね、とはにかむ。

「どういうことだ？」

「なんか懐かしい感じするんだよ。初対面なのに不思議だよな」

「……」

彼の感性はいったい何を感じ取っているのか。精霊たちがあの炎からこの少年を守るのは、この辺にも由来しているのだろうか。

カンナの疑問を余所に、リリスは立ち上がった。

「腹ごしらえも済んだら、いざ出陣！」

目指すはラダト大聖堂。

第6話

大聖堂はそのほとんどが幕で覆われていた。工事の際に埃が辺りに飛ばないようにという配慮と、大工たちの安全も兼ねている。

「父さん」

リリスは沢山の木工のなかから父の姿を見つけると大きく手を振った。父親とおぼしき男が歩み寄ってくる。

「持ってきたよ、コレ」

そう言ってリリスは先ほどの設計図を彼に渡した。

「おお、ありがとう。どうだ、ラダトは。大きいだろう？ ゆっくりしていくといい。少しくらいなら母さんも怒らないだろう。……こちらは？」

ひとしきり話した後、父親はカンナの方を向いた。

「カンナだよ。助けてもらったんだ」

俺も助けたけどな、とリリスは一言加える。

「それは、息子がお世話になりました」

「いえ、偶然ですから」

頭を下げる父親に軽く会釈すると、カンナは大聖堂を見上げた。その全貌を今は見ることができないのだが、この幕が取り外されれば、さぞや壮大な光景なのだろう。

「中って覗けるの？」

リリスが父親を見上げた。父はうなずく。

「ああ、お祈りしていくといい。帰り道も危険は多いからな」

「うん。カンナ、行こうぜ」

じゃあねと父親に手を振ると、カンナの手を引いてリリスは駆け出す。父親はその光景を目を細めて眺めると、自分の仕事へと戻っていった。

「そんなに慌てなくてもいいだろう」

走り出したリリスにカンナは声をかける。

「うん、なんか少し胸騒ぎがしたんだ。父さんの雰囲気は薄いつていうか……うまく表現できないけど」

「薄い？」

「薄い……というか消えそう？ ううん、なんかモヤモヤしてるけど、とにかく早めに作業を終わらせた方がいいと思うんだ」

「……」

こいつ只者ではないのかもしれない。何らかの虫の知らせはおそらく正しいものだろう、しかし経験が少ない分、うまく表現できずにいるのだ。

聖堂の中は誰ひとりいなかった。2人の足音だけがやけに大きく響く。最奥に祀られている神に一礼してから、リリスは横へとそれた。

おもむろに壁を叩きはじめる。

「どこかに扉があるはずなんだ」

聖堂は特別な空間であるから、あからさまに判るような扉は付けないのだと父親が言っていたのを思い出す。先ほどの設計図を頭の中に描きながら壁をさぐっていると、ガコン、という音が聖堂内に突如響いた。

「やつばい……」

リリスは肩をすくめて小さくなると、辺りを見回す。幸いにして外の工事の音にうまく隠れたらしく、リリスたちの行動に気がついて中に入ってくる者はいないようだ。

リリスの目の前に隠し扉が現れた。それに手をかけると、その隙間からカンナが先に中へと入る。続けてリリスも足を踏み入れた。

「覚えているか？ 設計図」

カンナの問いかけに、リリスは無言のままうなずいた。

目的の空間は祭壇の真裏。そしてその入口は今いる通路沿いと記憶している。リリスは壁を慎重にさぐる。

「あ、カンナ。ここ……」

リリスは装飾された壁に隙間を発見してカンナを呼んだ。

「ここか、扉は」

隙間を確認しつつカンナが呟いたそのときだった。

「ご名答」

「?!」

第三者の声に、リリスとカンナは振り返った。そこにはこちらを見下ろす男が立っていたが、どう見ても神官でないことは一目瞭然である。

薄汚れたシャツとズボンに、裾の破れたベスト。だらしなく肩まで伸ばした髪は清潔感のかけらもなく全体的に埃っぽい。いやらしい笑みを浮かべたその顔は、八虫類を思わせるような顔つきである。
「お前はっ」

この声はどこかで聞いたことがある。そう、こいつはあの夜、父親を脅しに来た男だ。

座り込んでいたリリスは立ち上がった。

「リリスくん、初めまして」

「!」

（なんで俺の名前知ってるんだ?!）

突然名前を呼ばれて、リリスは後じさる。

「なんでと聞かれると……やっぱり愛、かなア」

「?!」

男の台詞に、リリスは目を見開いた。自分の考えたことが、男の耳に筒抜けなのだ。

（何者だ、こいつ）

ただの盗賊ではないのか。人の心を読む術師、それともそういう能力を持ち合わせている人間。そもそも人間ではないのか？

リリスの脳裏に様々な可能性がよぎる。

その男の前に、カンナがリリスを庇うように立った。

「おやおや美しい友情かい？ 泣けるねエッ」

そう言うが早いのか、男はカンナのみぞおちめがけて勢いよく蹴りを入れた。カンナはそれをひらりとよけた。

……かと思つたが。

「ぐっ」

カンナはその場にうづくまる。

「上手く避けられそうだったけど惜しかったね。そちらの行動は手
に取るようにわかつちやう。ボクってすごい」

うづくまつたカンナを足で乱暴に避けると、男はリリスにすり寄
つた。それからゆるりと、リリスの頬をなで上げる。

「ホントはね、キミももう契約だったんだ。ホラ、キミの住む所
って魔法村でシヨ。そしたら思いのほか結界が強くて、結局キミは
もらえなかつたんだよね」

頬を撫でられる感触に、全身不快感が駆け巡る。男はチロチロと
見え隠れする蛇のような長い舌で舌なめずりをした。

「でもここは村から遠くて結界も弱いから安心。それに今日はまだ
お祈りしないでシヨ。だめだよー精霊への祈りを忘れたら。ボク
は嬉しいケド」

嫌悪感と吐き気が一緒になって押し寄せる。しかし反撃しても食
い止められるのだろう。

すぐ脇でうづくまっていたカンナが、身体もまだあまり動かない
まま、男の足首を掴んだ。

「や、めろっ」

男はリリスの頬に手を置いたまま、カンナを見下げた。

「おや、まだ生きていたか。綺麗に蹴りが入ったから死んだと思っ
たが。だつたらしょうがない」

そう言つと、男はカンナに手をかざした。

「？」

カンナはその行為を訝しげに見上げた。何をやっているのかわか
らない。

しかしリリスは耳元で男のささやき声を聞き、それが魔法を召喚
しているのだと気がついた。

「カンナ！ 逃げるんだ！」

リリスが叫んだ瞬間。

男の掌から、黒くドロドロとした塊が現れ、カンナめがけて勢いよく発せられた。その至近距離からの攻撃は、カンナを隠し通路の外まで飛ばす。

「カンナアーツ！」

今の攻撃でカンナに致命傷を負わせたことは、見なくても推測できた。

「これで邪魔者は居なくなつたネ」

男は、今し方黒い塊を放った手でリリスの髪を優しく撫でつける。リリスは男を睨み返した。

「お前ッ」

「許さないからなつて？ でもキミひとりじゃどうしようも出来ないでシヨ」

「……ッ」

「さて、キミをアジトに招待しげあげるヨ。魔法村の人間の体液は魔力を高める効果があるんだ。血、汗、涙、精液、排泄物。キミはゴチソウのかたまりだヨ」

男はカラカラと乾いた笑いを通路に響かせると、リリスの背後の隠し扉をトンと押し開けた。

第7話

カンナは勢いよく飛び起きた。

（……ここは、どこだ）

男に吹き飛ばされて、その後の記憶がない。

てつきり大聖堂の外で倒れていると思ったが、どうやら誰かの家にいるらしい。助けてもらったのだろうか。しかし家にしては何もない部屋だ。窓と扉と、自分が横になっていたベッドだけ。

とそのとき、部屋のドアが開いた。

「おっ、気がついたか？」

そこには大工姿の男が1人立っていた。

「あなたは……」

「大聖堂の改修工事やつてる大工の1人だよ。あんた、親方んトコの坊主の友だちなんだろう？ 親方がそう言ってた」

「あなたが助けてくれたんですか」

「いや、親方だよ。まあ宿舎に運んだのは俺だけど。でももう元気そうだな、怪我も無さそうだし」

よかったな、と男は爽やかに笑った。カンナは安心して頭を下げる。

「それで、親方さんは？」

「ああ、親方なら今頃神官のトコだよ。なんかえらく急いでたけど」ということは、リリスの父親は神官に告げるのだろうか。神殿内に盗賊のアジトがあるということ。

（だったら親方さんも危ない目に遭うんじゃないか……）

カンナはベッドから素早く立ち上がった。

「お世話になりました」

「おや、もう動けるのかい？ あんまり無理はしない方がいいよ」「大丈夫です。行かなければならないところがありますので」

カンナは男に一通り礼を述べると、何事も無いかのように宿舎か

ら出た。辺りは既に真っ暗。リリスの父親に届け物をしたのが午前中だったのを考えると、だいぶ長い間気を失っていたことになる。

辺りを見回して大聖堂の位置を確認すると、カンナはそこへ向かって駆け出す。リリスの父親を捜そうかとも思ったが、まずはリリス本人の安全を確保することが先だ。

日が落ちた後の大聖堂は、逆に怖い雰囲気すらあった。

誰一人としていない聖堂前の広場に到着したカンナは辺りを見回す。それから懷に手を入れて小さな木片を取り出すと、そこになにやらサラサラと書き殴る。そう、簡易式の呪符だ。

まだ先ほどの男がいるかもしれない。呪符でどれだけ護身できるかはわからないが、無いよりもあった方が心強い。

先ほどの隠し扉を、音を立てないように開け、盗賊のアジトの扉へと手をかける。

人の気配はない。

「……リリス？」

声をかけるが返事もない。どこかへ連れ去られてしまったのかも知れない。

しかし、そのうち暗がりにも目が慣れてくると、彼の姿を容易に見つけることが出来た。リリスは確かにそこにいた。

彼は床に横たわっていた。

背中には、大きな傷。

「リリス！」

駆け寄って、まだ息があることを確認する。見れば、背中以外にも無数の傷を受けていた。まといっている衣服も無残に切り裂かれている。

「あの野郎！」

カンナは得も言われぬ怒りを覚えた。男に対してなのか、リリスを守りきれなかった自分に対してか。

辺りを見回して目的の男を捜すが、どうやらここにはいないようだった。

（とにかくリリスを安全な場所へ運ぼう）

カンナはリリスを抱え上げると、足早にその部屋を後にしたのだ。
った。

リリスはふわふわとした感覚の中を漂っていた。

（なんだろう、この感触）

目を閉じたままぼんやりと考える。

肌に当たる感触はふわふわと柔らかくて優しくて、なんだか落ち着く。それに重ねて、心地よい温かさが伝わってくる。

今までに感じたことのない感覚だが、懐かしいような気もする。

ああそうだ、羽毛布団に似ているかも知れない。

（羽毛……羽根？）

リリスは思考を止めて、ゆるりと目を開けた。

（ここ、どこ？）

暗くてよく分からないが、窓からかすかに漏れる月明かりを目にして、そこがあのアジトではないことがわかる。

（夢、だったのかな）

などと自分に都合の良いように考えてみるが、身体の節々が悲鳴を上げていることから、あれは夢ではなかったのだと認識せざるを得ない。

あの男に乱暴されて、心も身体もすっかり疲れ果てていた。全身がまだヒリヒリと痛む。

思考を読まれることの恐怖。

ただ無になるしかなかった。なんの抵抗も出来ないのが悔しかった。傷口から流れ出す赤い血を見ても、泣くことすら出来なかった。
（忘れよう）

そう結論を出して、リリスは再び目を閉じた。全部忘れて、もう少しだけ、このふわふわとした感覚に酔いしれていたかった。この温もりは、全ての後悔や罪悪感、恐怖を包み込んでくれるような気がする。

目を閉じるとやつぱり心地よくて、リリスはふわふわの中心に顔を埋めた。

と、そのとき。ふいに、彼の頭に、誰かの大きな手が触れた。

「！」

リリスは勢いよくそこから身体ごと引き離れた。まさか、まだあの男が傍にいたのかと。

「……警戒しなくてもいい。俺だ」

「あ……」

暗がりの中で優しくささやくように聞こえた声は、カンナのものであった。

「……カンナ」

どうやら自分は、カンナの足の間に身を置いて、彼に寄り添うようにして眠っていたようである。

ということは、さきほどのふわふわした感覚はカンナなのか。

（……どの辺が？）

ぼんやりとカンナの顔を見上げてみるが、ふわふわした髪の毛、ということでもなさそうだ。

「疲れただろう？ ゆっくり休め。安心しろ、ここは昨日の納屋だ」
リリスの意識とは違うところでそう言われて、頭からぐいと引き寄せられた彼の胸は、当たり前だがふわふわでも豊満でもなかった。でもリリスにとって、そんなことはこの際どうでもよかった。ただ、今は安心できる誰かの傍にいられば、それだけで心が救われるようだった。

その居心地の良さに瞳を閉じながら、カンナに尋ねる。

「カンナは……大丈夫なのか？」

「ああ。お前の親父さんに助けてもらったから大丈夫だ。今は自分の心配だけしてろ」

「うん……ありがと」

それだけ言うと、リリスはすうと再び眠りに落ちるのだった。

第8話

リリスが眠りに落ちていくのを見届けながら、カンナはあのときのことを思い出していた。自分が吹き飛ばされたときのことだ。

（あの男……）

あのうごめく黒い球体。あれは人間の力で出来るものではない。

（普通の人間には使えないし、魔法を使える者であっても、あのようない力は使えないはずだ）

そうすると、考えられるパターンはひとつしかなかった。

「悪魔に心売った……か」

思わず呟く。

しかしそう考えれば、今までの不可解な出来事にも納得がいった。たとえばリリスの行動を把握されていたこと。使い魔をつけていれば、自分がその場にいらなくてもリリスの様子は分かるだろう。

それからリリスを欲しがったこと。悪魔とそれに準ずる者は、魔法村の住人を喰うことにより力を得て、より強くなることができるという。まあこれは言い伝えのレベルであるが、目の前に素材があれば試さない手はないだろう。

しかし。

（今日のこれは酷すぎる）

リリスは一人で旅が来ているとはいえ、まだ年端もいかない子どもだ。それを切り刻んだうえに、使い捨てのように放置をする。

相手が悪魔だからと言って、納得できるものではなかった。カンナにはそれほど衝撃的だった。

それから。

何も出来なかった自分にも反吐が出るほど嫌悪した。

「お前の村に戻るぞ」

日が高くなってきたところで、カンナがリリスに告げた。

肉体的疲労に精神的疲労が重なり、半日ほど眠り続けていたリリスだったが、ようやく落ち着いたのだらう、つい先ほど目を覚ましたところである。

「村？」

「ああ。だつてもう用事は済んだだらう？　だつたらここから早く離れた方がいい」

「……カンナは？」

「俺もお前の村まで行く。途中であの男がまた出てこないとも限らないからな」

「う、うん」

カンナの『あの男』という言葉に、リリスは一瞬身を固めた。恐れるのも無理はない。

「心配するな。俺が守るから」

「……」

「どうした？」

リリスが不思議そうに見上げてくるので、カンナが聞きかえす。すると彼は小首をかしげた。

「どうして俺のこと、こんなに助けてくれるの？」

なんだか今更な気もする質問に、カンナは小さく笑った。一部関わってしまったからというのも理由のひとつだし、職業病からくるものが理由なのかと思っただが、実はカンナ自身よくわかっていないのだ。

ただ、なんとなく思うところがある。

「昨日言われた言葉をそのまま返すようで悪いが、お前はなんだか懐かしい感じがする。こんな理由では不満だらうか」

ぶっきらぼうに言つてのけるカンナに、リリスはふわりと笑った。

出発が決まったからといって、寢床にしていた納屋からまっすぐリリスの村へ向かうわけではなかった。

いや、カンナはむしろそうするつもりだった。あの男に出くわす前に一刻も早くここから離れるべきだと提唱した。しかし。

「旅に出る前は、儀式をしなきゃいけないんだ」

リリスがそう言うので、その儀式ができるという大聖堂に一旦寄ることになった。

しかし昨日の今日で、よくもまあこの場所へ行こうという気になるものだ。

こっそりため息をつくカンナをよそに、リリスは祭壇の正面に立ってお祈りを始める。

「ゼンチゼンノウの神よ、ねがわくばわがあゆみしみちをてらしたまえ。なんぢのみちからをさずけたまへ。なんぢ、われをめでたまえ……」

（相変わらず棒読みじゃないか……）

リリスのお祈りを聞き流しながら、苦笑をこぼさずにはいられない。

聞いたところ、いにしえの言葉が混ざっているようである。しかしリリスはこの祈りの言葉の、果たして何パーセントを理解しているのだろうか。

（全知全能もわかってなさそうだな）

妙に納得するカンナである。

しかしその全く理解できていないであろうリリスが、祭壇に祈りの言葉を捧げていくごとに、精霊たちが彼のまわりに集ってくるのだから不思議でたまらない。

おそらくリリス自身の力が元々強いのだろう。しかし自ら精霊を引き寄せる能力がないため、祈りの言葉を媒体として、精霊を呼び寄せていると考えられる。

ひたすら棒読みの祈りの言葉で、だ。

「はー、おわったー」

一気に祈り終えたリリスは、晴れ晴れしい笑顔でカンナの方を向いた。

「さて、帰ろー」

「そうするか」

リリスとカンナが一步踏み出したとき、大聖堂の入口を人の影が塞いだ。見れば父親である。

「あ、父さん」

「リリス、まだいたのか！」

父親はリリスの姿を確認して焦る。

「……父さん？」

「早く、早く家に帰りなさい！」

「？」

何を焦っているのかさっぱり分からないリリスは、父親の傍へ行こうと足を踏み出した。そのとき。

「早くしないとあいつが……ぐはぁっ」

言いかけたところで、父親は突然吐血した。そのまま膝をつく。

「なッ」

「と、父さん?!」

その場に崩れ落ちる父親に、リリスは駆け寄った。父の身体を抱きかかえると、その背中の大きな切り口がリリスの目に飛び込んできた。

鋭い刃物で斬りつけられたようなその場所から、どくどくと赤い血が流れ出てくる。

「父さんっ、父さんっ」

「早く村に戻って……」

「しゃべったら駄目だよっ」

「母さんと2人だけ、でも……逃げな、さい」

「なに、言って……」

「リ……リス……逃げなさい」

瀕死の状態ながら、父親は何度も何度も逃げろと言う。

なぜそうしなければならいいのか理解出来ないリリスは、どうしていいか分からない。

ただ、出血の止まらない父親をここにひとり残していくことだけは、どうしてもできなかった。

その父親の上に、突然影が落ちてきた。

「逃がさないよ」

「！」

リリスはその台詞に、いやその声に身を固くした。

この声は忘れもしない、いや忘れてしまいたい声そのものだった。

「お前はッ！」

固まるリリスの後ろから、カンナも切羽詰まったような声をあげた。

「探したよ、リリスちゃん」

こちらを見下ろしてきた男は、口元でニヤリと嘲笑った。

第9話

身を固くして動けないリリースと男の間に、カンナが割って入った。そう、ちゃんと守ると約束したのだ。

「おや。キミは昨日情けなくも吹き飛ばされたヤツじゃないか。死ななかつたんだネ」

「……」

男は口元から笑みをはずさないまま、カンナを挑発してくる。人を見下げたような視線と、いやらしい口元が気に入らなかつたが、ここで挑発に乗ってしまつては相手の思うつばである。

しかしそんなカンナを見透かすように、男はふんと鼻で笑った。

「今日も飛ばされに來たんだ口？」

「……」

「なあに？ 怖すぎて声でもないノ」

「……祭壇の前で、昨日の力が使えるのか？」

カンナは冷ややかに言いはなつた。

「悪魔に魂を売つた、サイテイなヤツめ」

「……」

男の顔から笑みが消えた。カンナを睨んだまましばらく口を閉ざしていたが。

「サイテイ？ サイコウの間違いだ口？」

男の目に妖しい輝きが宿るのを、カンナは見逃さない。

「おい、離れている」

カンナは背後のリリースに声をかけると、正面の男を見据えた。

リリースは言われるままに、父親をどうにか担ぎ上げてその場から離れる。男に対する恐怖心でなかなか動かない己の身体を必死に動かしながら、カンナの方を見た。

カンナは静かに立ったまま、眼前の男を見据えていた。

（こういうときって、どうするんだっけ）

自分のまわりに危険が降りかかったときに唱えるおまじないがあった。子どもの頃ケンカして怪我して帰ってきたときに、母親が教えてくれたのだ。

確か、歌のようなものだった。

大聖堂の壁により掛かって、流血やまない父親を抱きかかえながら、リリースは必死に思い出そうとする。

（助けないと……）

カンナにまた、怪我をさせてしまう。自分のせいで誰かが傷つくのは、もう見たくなかった。

とそこへ。

「俺はネ、祭壇の前でも平気なノ」

カンナの目の前の男がニヤリと笑った。

「俺は悪魔じゃない。悪魔に魂は売ったけれども、まだ人間だ。だから祭壇があるうがなかるうが、力が使えないわけじゃない」

「……そうか」

「例えばコレ……とかなッ」

男はそういうやいなや、弓的を射るようなポーズをとった。

次の瞬間、昨日カンナを吹き飛ばしたあの黒い球体が、瞬間に弓の形へと変化して、男の手中に収まる。

男はそれをギリギリと引くと、カンナめがけて矢を放った。

カンナは横に飛んでそれを避ける。が、その矢はカンナの黒いマントを貫いた。

「っ！」

矢の勢いでうしろに引つ張られる前に、素早くマントを脱ぎ捨てる。

片膝をついて着地すると、今度はそこに矢の雨が降ってくる。

カンナはぎりぎりで転がって避けた。

すると今度はそこへ、昨日カンナを吹き飛ばしたあの球体が飛んでくる。

「どーした。体制立て直す暇もないナア」

男が愉しそうに嘲笑う。

笑いながら次々と魔法で矢や球体を作り出し、カンナめがけて放つ。

彼の言うとおり、体勢を立て直す暇などカンナには微塵もない。でも、ただ逃げ回っているわけではなかった。

「お前には負けない」

カンナはそう言うと、男の攻撃から逃げるのをやめた。

男はニヤリと笑う。

「どうした、ついに諦めたか」

「愚か者め。俺様がただ単に逃げ回っているとでも思ったか」

カンナもニヤリと笑い返すと、両手を真横に広げた。

まるで、俺を狙ってくれと言わんばかりに。

「まさか俺の力を使い果たさせるために逃げ回ってたの力？ だったら無駄だ。昨日リリスちゃんからたんまり魔力を頂いたからナア」

「……」

カンナは男を睨む。

（魔法村の噂は本当だったか）

しかし考え事をしたその一瞬の隙に、男は今までと比べものにならないくらい大きな球体を作り出す。それから、カンナめがけて勢いよくそいつを放った。

「カンナッ！」

リリスは思わずカンナの名を呼ぶ。避けきれないのが見て取れる。しかし。

バチバチと、目もくらむような白い火花が飛んだ。

それと同時に、周りの雰囲気も変わる。

そう、昨日リリスが感じたふわふわの感触、あれに似ている。

カンナの方を見やれば、黒い球体は、カンナの手前で見えない何かに阻まれていた。勢いで前に行こうとしているが、それよりも大きな力で押しとどめられている。前に行こうとするたび、青白い火花が飛び散る。

まもなくして、その黒い球体は、散り散りに消し飛んだ。

「なっ」

男は目を丸くする。

今まで確かに優勢だったのに、今までよりも大きな力を放ったのに。それを跡形もなく消されてしまったのだ。

「俺の足元になにかがあるか、わかるか？」

静かに告げるカンナの声に、男は驚愕の色をかくせないまま、カンナの足元に目を落とした。

「……魔法、陣」

男が呟くとおり、カンナの足元に、青白い光で魔法陣が浮かび上がっていた。

第10話

リリスはふと閃いた。

カンナの魔法陣を見たからなのかは分からない。でも思い出したのだ。全ての危険を取り除くおまじないを。

目を閉じて、深呼吸をする。

まずは心を落ち着かせなければ。

「お前、何者だ……」

一方、カンナと向かい合っている男は、かみ殺したような声を出してカンナを睨みつけていた。

足元の魔法陣は、どの魔法の種類でもない、見たことのない物なのだ。しかも攻撃から逃げつつ、小さな石を置くだけでかたどられる簡単なもの。

しかし、どの魔法陣よりも強力。

そんな未知の力を前に、男が怯えないわけがなかった。その男の質問に、カンナは答えない。

「あまり力を使いたくないからな。……一発で仕留める」
そう言つと大きく息を吸った。次の瞬間。

ふわり。

白い羽根。

「！」

男はさらに目を丸くした。

カンナの背後に現れたのは、紛れもない羽根。

「天使の、羽根……」

無意識のうちに後じさる。

悪魔にとって天使は天敵だ。それは、悪魔ではないが、悪魔に魂を売ったこの男にとっても同じこと。

男はちらりと背後を見た。出口の場所を確認したのであろう。

「逃げるのか？」

「出来ればネ」

男は冷や汗を流しながら力なく笑う。

しかし走り出そうとした次の瞬間、男はがくんと膝を曲げて崩れ落ちた。

「な、なんだ?!」

彼自身、自分の身になにが起きているのか分からず声を荒げる。

カンナも何が起こったのかわからず、訝しげに男を見下ろしていたが、ふとその耳に静かな歌声が聞こえてきた。

「……?」

声のする方を見れば、聖堂の片隅で、リリスが目を閉じて歌っている。

その腕に父親をしかと抱いたまま、ぶっきらぼうに。

しかしその不器用な歌い方で、不思議の辺りの気配が落ち着くような気がした。そう、精霊が騒ぐのをやめたかのような静寂。

精霊たちはリリスの父親の傷の手当をはじめ、カンナの目の前の男の身体を押さえつける。

「ちょうどいい、覚悟するんだな」

カンナはそう告げると、男の方に向き直る。

それから、最初に男がポーズをとったように、弓を射るように身を構えた。

男と違うのは、眩しいくらいに白く輝く球体が現れたこと。そのまま、弓へと姿を変える。

「観念しろ」

一言そう言つと、動けないでいる男めがけて、その矢を放った。

「うわああああああっ」

「!」

男の叫び声に、リリスはハッとまぶたを上げた。

カンナと対峙していた男は、その矢に耐えきれず絶叫していた。それよりも驚くべきものがリリスの目の前にあった。

「カンナ……羽根」

目を閉じていたから気がつかなかった。歌っていたから気がつかなかった。

「ああ、驚いたか」

カンナの言葉にリリスは正直にうなづく。

その姿にカンナは小さく微笑むと、リリスの前に座り込んだ。

「親父さんの容態は」

その台詞にリリスは力なくかぶりを振る。

「そうか……」

カンナは父親の手をそつと手に取ると、腕の前で組ませてやる。するとその父がゆるゆると目を開けた。

「天使……さま、でしたか」

「父さん！」

「しゃべっては駄目だ」

リリスとカンナの言葉に、父親は微かに笑いながら首を横に振る。

「天使さま、うちのバカ息子が……世話ばかり、かけて」

「いや、助けてもらったのは俺の方で」

「天使さま。この子は……リリスは、左手に黒い羽根を、持っているん、です」

「！」

父親の言葉に、カンナは目を見開いた。

リリスを見やれば、言葉の意味が分からず首をかしげている。

「だから、これから、迷惑を……かける、でしょう。天使さまの、いかように、でも……」

「心配しないで」

カンナがそう声をかけると、父親は安心したようだった。微笑んだまま、静かに目を伏せる。

「リリス、動けるか。神官を呼んできてくれ」

羽根をしまうのに時間がかかるんだ、とカンナは苦笑した。

左手に黒い羽根。

この世界から魔法という力はほとんど無くなっているが、世の中には『マホト』と呼ばれる人種がいた。天性の魔力を持ち、神に最も近い人間。天使にも悪魔にもなれる存在、そしてそれを凌いで神にもなれる存在。

しかし彼らの多くは悪魔へと変遷してしまうため、左手に黒い羽根を持っていると表現された。

そしてマホトということが発覚した者は、その力を発揮する前に狩られてしまうのが常だった。

今、神官を呼びに行っているリリスも、今はまだ力が覚醒していない状態であろうと、周囲にはばれてしまえば狩られることは間違いない。

あの少年の先の未来には、どんなに目をこらしたところで、幸せなど見えないのだ。

（天使は人を幸せにするんじゃないのか……）

カンナは眉をひそめた。

リリスの歌で呼び寄せられた精霊のお陰もあって、目の前の父親の背中への傷はだいぶ治まっていた。カンナもそれに手助けしてやりたいが、昨日リリスを治したので、あまり体力が残っていないのも実状だ。

カンナの羽根がすっかり消えかけた頃、リリスが神官を連れてきた。

盗賊のアジトの件、そしてその盗賊をなんとか倒したことを手短かに説明し、大きな傷を負った父親を神官にあずけた。

「リリス、気になることがある」

カンナが神妙な面持ちで切り出した。

「どうした？」

「お前の親父さん、村がどうか言っていなかったか？」

「そういえば……イヤな感じがする」

それから勢いよくカンナを見上げた。

「父さんは、母さんと逃げろって言ってた！」

「まさかあいつ、母親にまで?!」

カンナの台詞にリリスは力強く頷いた。

「俺、村に戻る!」

「おい待てっ」

走り出したリリスの後を追って、カンナも駆けだした。

第11話

リリスとカンナはひたすらに走った。

体力は尽きかけている。しかし休む時間が惜しかったし、休もうとも思わなかった。半日かかる道のりを2時間弱で走って、ようやくたどり着いた村の様子は一変していた。

「……これ」

リリスは混乱していた。

そう。

そこには村があつたはず。はずなのに。

「本当にこの場所なのか？」

カンナの質問に答える余裕はない。

目の前は単なる牧草地だった。短い芝生が敷き詰められた平原。

リリスは歩を進めた。

火の見やぐらも、隣のおばさんの家も、なにもない。リリスが住んでいた家もちろん跡形もないのだ。壊されたとか火事で焼けたとか、そういう部類ではなかった。

消えた、と表現するのが的確だった。

ここが村であつた証明になるものを探したい。

「あつ」

村であつたであろう場所をひとしきり歩き回ったあと、リリスは声を上げた。それから、最初に旅立ちの儀式をした林へと足を踏み入れる。

「……あつた」

そこにはリリスお手製の貧相な祭壇があつた。すべての始まりとも言える、小さな祭壇。

それを見て、リリスはうなだれる。安心したのと同時に、絶望感のようなものがこみ上げてきた。

「カンナ、やっぱりここは俺の村だよ」

「……」

「これから俺、どうすればいいのかな」

ぽつりと呟くリリスに、カンナは酷な質問を投げかけた。

「悪魔にでも、なるか？」

カンナはマホトと会ったことがない。しかし彼らは、こういう絶望感から悪魔への道を選ぶ場合もあるのではないかと、ふと思った。悪魔へ転向する者は、全てがそれを望んだわけではないと思いたい。そしてリリスがそれを選ぶのであれば、彼を処分しなければならぬことも考えていた。人々に幸せをもたらすといわれる天使の立場として。

この、年端もいかない少年を。

「……悪魔？」

「そうだ」

「ソレになれるの？ 俺が？」

「そうだ」

「……」

リリスは顔を上げない。

その様子を見ながらカンナは確信していた。天使の世界から地上へ来たときの警告音は、このことを意味していたのだと確信していた。

リリスと長い時間を過ごさずによかった。これ以上長くいたら、情が移るところだった。そうすれば、彼を処分することにためらいが出てくる。

「……」

しかしそこまで考えて、カンナは絶句するしかなかった。

（自分が考えていることの方が、よっぽど悪魔のようだ）

天使は人々を幸せにする存在。なのにその『人』を簡単に処分などと言い切ってしまうていいのか。

「……父さんは」

カンナが考えを巡らせているところに、リリスがぽつりと呟いた。

「父さんは大丈夫かな」

「お前の呼んだ精霊が、今頃頑張っているはずだ」

「……うん」

小さくうなずくと顔をあげる。

「俺は悪魔なんかにはならない」

「そうか」

「第一どうやってなるのかも分からないし。なったって良いこと無さそうじゃん」

「そうだな」

「俺、母さんを探すよ」

そう言つと、林の外へ向かつて歩き出した。

「だって村が壊滅したとか、そんなんじゃないし。消えただけだろ？」

「そうだな」

「理由は分かんないけど、どこかにいると思うんだ」

リリスはしきりに言葉を繋げる。

たったの15歳で帰る場所を失った彼の心中は、不安感で溢れているに違いない。それを、必死に平常心を保とうとしているのか。

「カンナはどうするの？」

林を抜ける前に、リリスが振り返って尋ねた。

「やっぱり家に帰るのか？」

「そうだな……」

警告音も鳴り止んだ今、カンナの仕事はすでに終わっているのだろ。また、リリスが悪魔に変貌しないのであれば、カンナがしなければいけない仕事はない。それに、今のリリスを処分するという気にはなれなかった。それが神の意志に逆らうことだとしても。

だったらカンナには地上に残る理由もなかった。

そこへ、突然にふわりと懐かしさが漂う。

「特に理由もないし、リリスの村でも探すか」

考える前に、言葉が口をついて出た。

「え？ ホントに？！」

「なんだ、ついていいたら駄目なのか」

「うっん、大歓迎！」

大喜びで太陽の下に出たところで、頭上からふわふわと白いものが降りてくる。リリスの頭に着地した。

目の前にあるのは白い……。

「俺のパンツじゃねーか。なんて雰囲気のない……」

しかし、どこかに見覚えのある光景。

「なんだよー。せつかくカッコよく出発しようと思ったら、こんなところにオチ？！」

「なんだよ、オチって。ほら、置いていくぞ」

騒ぎ出すリリスを追い越して、カンナが歩き出す。

リリスは上から振ってきた自分の下着を見やると、ふふりと笑みをこぼした。

「俺、こうやって出発したんだぜ」

「なんの話だ」

「出発前に母さんが抱きしめてくれてさ」

「……抱きしめて欲しいのか？」

「要らないよ！」

庭先でふわふわと笑う母の姿はそこにはない。リリスは村の外へと駆けだした。

キラキラと光る、未知の世界へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1503p/>

左手に黒い羽根

2010年11月26日12時41分発行